

遼寧大学シンポジウムの思い出

田 中 則 仁（経営学部）

はじめに

馬興国先生の突然のご逝去の報に接し、本当に驚きかつ残念でした。心から哀悼の意を表します。これまで、本学の内外で馬興国先生にはとても親身で適切なご指導とご協力を頂きました。学内での会議やシンポジウムはもとより、何といっても中国での馬興国先生の人脈の豊富さと影響力の強さは、現地に行って初めて感じ入った次第です。

それはこれまで長年にわたり馬興国先生が現地の大学や学会、研究会で表に立ってリードし、時に応じては裏に回って会議の下準備などを懇切丁寧にしてこられた信頼の蓄積であったことに間違いはありません。

遼寧大学シンポジウムでの思い出

二〇一一年九月に、本学アジア研究センターの前身であるアジア問題研究所と遼寧大学共催でシンポジウムを行い、秋山憲治先生、横倉節夫先生、三島斉紀先生、横川和穂先生らと瀋陽市に出かけたことは今でも印象に

残っています。

学術シンポジウムですから、事前に共通テーマや全体構想を固め、そのうえで参加する研究者の専門分野で発表テーマや内容を詰めていくのが手順です。ところが発表論題などに関する、馬興国先生からのアドバイスは意外なものでした。「発表テーマは何でもいいのです。日本に関する現状報告や論説であれば、どのような内容でも構いません。」これでシンポジウムになるのかな、大丈夫かしらと心配になったことを今でも思い出します。

半信半疑のまま、七月末に馬興国先生のもとに発表原稿を送付し、皆で瀋陽にでかけ遼寧大学との共催シンポジウムの当日を迎えました。遼寧大学では研究者や大学院生、学生も来場しており、なかなかの盛況です。学生たちは動員がかかったのかなと思っていましたが、みな熱心な日本研究の若手学徒でした。私の発表テーマは日頃からの研究分野である「日本企業の国際戦略」と題して、海外進出日系企業の投資戦略、国際ビジネスの展開についての現状と課題を論じました。発表後の休憩時間に、何名かの若い研究者から、内容に関する質問や今後連絡を取り合いたいとの申し出を頂き、その熱心さに感銘を受けました。

思い起こすと、馬興国先生は少なくとも私の発表に関しては、テーマを見たうえで、当該分野の研究をしている若い研究者や大学院学生に声をかけ、聴講を促したものと思います。このような配慮もあり、小職の学問的関心分野であっても、何らかのお役に立てたものと考えます。

学会誌への掲載

上記の遼寧大学シンポジウムから半年ほどたってから、学会誌が送られてきました。開けてみると、シンポジ

ウムでの発表論文が中国語訳され、横倉先生、秋山先生らの論文と並んで掲載されました。遼寧大学日本研究所「日本研究」二〇一二年三月号、通巻第一四二号です。表紙には一九七二年創刊とありましたので、中国では一九六五年から一〇年間続いた文化大革命の最中です。当時としては相当な挑戦であり覚悟のいる事業であったと思います。馬興国先生はこの学術誌の編集長を長らく務められたとのこと、このことを見ても先生の日本研究に対するご貢献とご尽力がただならぬものであったことは明らかです。これだけの歴史と伝統ある研究誌に掲載して頂いたのも、ひとえに馬興国先生のご尽力の賜物です。中国人留学生が、毎年学部ゼミ生や大学院学生として入ってきますが、この中国語の論文のおかげで、私への株が上がって、相当な過大な評価をしてもらっています。

瀋陽、大連での散策とこれからの課題

かつて満州国の中心都市であった大連、瀋陽市は、かつての日本時代の遺物も相当数残っています。大和ホテルなどその威容を見る機会もありました。馬興国先生の解説には専門家ならではの指摘や説明があり、表面的な観光案内を遥かに超えた蘊蓄がありました。通常の通り一遍の訪問では到底得られない知見をご披露頂いたことは、とても大きな財産です。日本と中国の国家間の関係だけでなく、一般の中国の人々がどのように日本を見て感じているかについても多くの話を伺いました。日中両国の歴史と経緯に精通した馬興国先生ならではの意見は、いまでも講義を通じて学生たちに伝えることができる貴重な経験です。

上記の遼寧大学シンポジウムの一か月後に、上海の日本総領事館が反日的な人々によって被害を受けました。

この時期に、中国でのセミナーやシンポジウムを企画していた他大学や諸機関は、軒並み事業の延期や中止を余儀なくされました。本学の共催行事も僅かな時間差で無事に開催できましたが、通奏低音のような当時の現地の風潮からすれば、馬興国先生の力なくして開催は困難であったと思っています。

本学と中国の各大学との交流は組織や機関として運営される交流ではありませんが、どのような状況でも最後は人と人との信頼関係で永続していくものです。私はもとより、馬興国先生にご縁があった皆様方と、先生の意志を引き継いで、これからも日中学术交流の流れを継続していきましょう。馬興国先生亡き後、私たちの役割はこうして培っていただいた両国の学术交流を、絶やすことなく続けていくことが馬興国先生への最大で必要な恩返しです。